

<活動目的>

学校保健は、WHO（世界保健機構）が1995年に世界的に取り組む健康課題としてのイニシアチブを立ち上げ、取り組んできている。取り組みは国によって異なり、コンゴ民主共和国の小学校では現在保健の授業は行われていない。しかし、アカデックス小学校には昨年保健室が建設され、児童の健康を守り、健康に関する情報発信の場としての利用を目指している。これは児童が健康への興味関心を高め、正しい知識を共有するために良い環境と言える。子ども同士で教え合い学び合うピアエデュケーションが、児童への健康教育方法の1つとして注目されている。同国では、感染症が児童の主な死亡原因の1つとなっているため、本研究では、教員が児童への持続的な手洗いを指導し、児童が感染症のリスクに気づき教え合うことで、予防行動としての手洗いを実施できるようになることを目的とした。

<活動概要>

活動期間：2015年8月7日（日）～2015年8月15日（月）

活動場所：コンゴ民主共和国キンボンド地区、Acadex 小学校

活動内容：ワークショップは感染症と手洗いについての2回に分けて行った。児童の関心や参加意欲を高めるために、体験する機会を多く設け、日本で作成したフランス語表記のポスターを用い、現地通訳の協力を得てフランス語で行った。ワークショップ後には、フィードバックや感想を伺うために参加教員へのインタビューも行った。感染症については、児童約30名と教員4名を対象に、病原体の潜む場所や実際の大きさについて説明し、顕微鏡での観察を行った。観察のしやすさより、トリコモナスとノミの標本を用いた。観察後には、手洗いの正しい手順の確認をし、予防としての手洗いの重要性を伝えた。手洗いについては、児童16名と教員3名を対象に、正しい手洗いの手順説明と手洗いチェッカーを用いた実践を行った。実践では学年混合グループを作成し、各グループに現地の教員1人、補佐役の日本人学生1人を配置した。また、最年長の児童には、教員を補佐し低学年の児童の指導に協力するよう伝えた。

<活動成果>

児童の理解度を測るため劇や説明の前後で3択の同じ質問をする予定であったが、説明時に質問を組込み挙手制で回答する方法に変更した。自信のない児童が多数の回答に合わせる可能性があり、正確な理解度を測ることが難しいと考えたためである。児童と教員は積極的に参加しており、感染症への理解と手洗いへの意欲的な反応や意見を示した。以下には、それらの成果について3つの点に注目し、予防としての手洗いの定着の可能性について述べていく。

1. 現地の教員による継続的な健康教育の可能性

児童16名の内、食事の前に手を洗うのは8名、手洗い方法の指導を受けたことがあるのは4名だった。他にも手を洗う4つのタイミングのうち、食事の前とトイレの後のみ知っていたり、手洗いでは、爪の下、指の皺、手首に洗い残しが多く見られるなど正しい手洗いの定着には至っていないことが伺えた。また、小学校内には手を洗うための装置が設置されているが、この地域では水が安定して供給されないこともあり、習慣的な使用は難しいようであった。

教員へのインタビューの際、参加しなかった児童にも説明をしたいため、使用したポスターや教材を残して欲しいと頼まれた。実際に、教員達は説明やポスターの内容をメモに取り、自らも手洗いや顕微鏡での観察をしながら、よりわかりやすい表現で熱心に児童に説明していた。教員が衛生的な手洗いの指導を実際に体験することで、手洗い指導を継続的に行えるようになると期待していたが、参加した教員の健康教育への意欲が高まっている様子が伺えた。

また保健の授業がなく、教員が健康教育を行う機会がないと考えていたが、本小学校では理科の授業で人体について学習していた。そのため、理科的要素を組込むことが健康教育の導入に有効であると考えた。また、保健室を利用したことで、児童と教員に保健室は楽しく学べる場と印象付けることができ、教員の了解を得て保健室にポスターを張り顕微鏡を保存したことで、児童への情報発信や教員による健康教育の場としての保健室の活用が可能となった。

2. 手洗い指導へのピアエデュケーションの導入の効果

児童達は積極的に手洗いに取り組んでいた。高学年の児童は、ポスターを見て手順を復習しており、低学年の児童は、高学年の児童や教員の真似をしながら手洗いに参加していた。特にグループで最年長の児童達は、役割を与えられたことにより自信がついた様子で、特に積極的な参加の姿勢を示しており、低学年の児童に教える様子も伺えた。アカデックス小学校の児童の多くは、普段の生活より兄や姉が弟妹の面倒をみているようであった。そのため、上級生が下級生を教えるピアエデュケーションの教育法は受け入れやすい環境であると考えた。

また、手洗いの順序を確認できるダンスを児童や教員と一緒にやった。児童や教員は年齢を問わず楽しそうに参加しており、振付けを教え合う児童や他の児童の真似をして踊り出す児童などもいた。後日、これに参加した教員が、児童に振付けを教えている様子も伺えた。ダンスを取り入れたことで、教員が児童に指導し児童同士が教え合う機会を増やす結果となり、ピアエデュケーションの導入を目指す上で良い効果を得ることができた。

3. 病原体への理解がもたらす予防としての手洗いの定着

日本人学生が、感染症が容易に広まる様子を劇で示し、児童になぜ主人公が病気になったかを質問したところ、何人かが手を洗わずに食事をしたためと答えた。児童は病気が感染する事実と、手を洗わないと感染症になりやすいことを理解していたが、目に見えない病原体の存在や大きさは理解が難しいようであった。しかし、児童の多くはワークショップに積極的に参加しており、前のめりになって説明を聞く姿もあった。感染症という新しい分野についての健康教育により、児童の知的好奇心を向上させ、目に見えない病原体への興味関心を高めることができた。

病原体の観察では、顕微鏡は小さいものを大きく見せる器具であることを強調した。顕微鏡に初めて触れる児童は実際に菌を見て非常に驚いていたが、何名かの児童に何が見えたか聞くと、バイキンと答えたりポスターを指差したりした。病原体の存在への理解が難しかった児童も、観察後に自身の手掌を見つめるなどの姿があった。教員も初めて見る病原体に興味深く観察しており、感染症ワークショップでは実際の手洗いは行わなかったが、教員から手を洗わないのかと質問をされたり、ワークショップに参加した児童が病気と手洗いの関係を理解し、今後は手を洗うようになるだろうとの発言を聞くことができた。これらの反応より、目に見えない病原体の存在の理解と、予防としての手洗いの重要性を児童と教員に伝えることができたと言える。

<まとめ>

今回の活動では、感染症のリスクと予防としての手洗いの重要性を理解した児童や教員が、他の児童や教員にそれを伝え、正しい手洗いへの意識が向上していくプロセスを確認できた。これよりピアエデュケーションは有効であると言える。教員たちはワークショップを主体で行ったことで自信がついたようで、健康教育への意欲も高まっていた。また、本研究により保健室の利用を開始し、健康教育についての情報発信が可能となった。そのため、アカデックス小学校では、今後は教員による感染症の予防行動としての手洗い指導と実践が習慣化する可能性が高いと期待される。

本研究は ORF と第 31 回日本国際保健医療学会学術大会（12 月福岡県で開催）での成果発表を検討している。資金援助をしていただいた湘南藤沢学会様をはじめ、本研究に携わって下さった医学部・薬学部・看護医療学部教員の皆様、共に渡航した学生の方々、現地での生活や活動をサポート・通訳して下さいました皆様、アカデックス小学校教員の皆様、皆様に感謝を申し上げます。ありがとうございました。